

論文要旨

氏名	多田 博昭
タイトル	The effect of <i>Lactobacillus reuteri</i> probiotics on peri-implantitis: a randomized placebo-controlled study
<p>論文の要旨</p> <p>インプラント周囲炎はインプラント治療における合併症で最も頻度が高いが、いまだ明確な治療法がない。プロバイオティクスとは、腸内細菌叢のバランスを改善し、人体に有益な作用をもたらす微生物のことであり、近年、歯周炎治療の補助療法として注目されている。インプラント周囲炎の発症の原因には歯周病原細菌が関与しており、プロバイオティクスがインプラント周囲炎に対しても有効である可能性が高い。そこで本研究では、抗菌療法後のメンテナンスとしてプロバイオティクス併用の効果を二重盲検プラセボ比較試験にて検討した。</p> <p>被験者は軽度、中等度のインプラント周囲炎に罹患している30名（男性8名、女性22名、平均年齢67.3±8.1歳）とし、すべての被験者はベースラインとして臨床検査（Pocket Probing Depth (PPD), Bleeding on Probing (BOP), modified Gingivai Index (mGI), modified Plaque Index (mPI)）およびPCR-invader法を用いて細菌検査を行った。その後、口腔衛生指導、歯肉縁上スケーリングを行い、抗菌療法としてアジスロマイシン500 mgを1日1回3日間の服用を行った。抗菌療法1週後を0週としプロバイオティクス群とプラセボ群をランダムに分類し、プロバイオティクスおよびプラセボの摂取を開始した。摂取4週、12週、24週に臨床検査、細菌検査をそれぞれ行った。統計学的解析にはWilcoxonの順位検定とWilcoxonの符号順位検定Bonferroni法を用い、$p < 0.05$を有意とした。なお、本研究は九州歯科大学研究倫理委員会の承認（承認番号15-11）のもと被験者の同意を得て行った。</p> <p>両群ともアジスロマイシン服用後に総細菌数および歯周病原細菌6菌種の菌数が減少したが、その後増加する傾向が認められた。また、2群間に統計学的有意差は認められなかった。PPDは、プロバイオティクス群において0週(3.64±0.83 mm)と比較して摂取4週(3.42±0.73 mm)、24週(3.21±0.84 mm)で有意に減少した($p < 0.05$)。一方、プラセボ群では有意な変化は認められなかった。またmGIに関しては、摂取24週においてプロバイオティクス群(0.93±0.79)はプラセボ群(1.53±0.92)と比較して有意に低値を示した($p < 0.05$)。BOP, mPIはプロバイオティクス群において減少傾向が認められたものの、統計学的に有意な違いは認められなかった。</p> <p>以上より、プロバイオティクスはインプラント周囲溝の細菌数に影響を及ぼさなかったものの、臨床検査値に改善が認められたため、インプラント周囲炎治療の補助療法としてプロバイオティクス摂取が有効である可能性が示唆された。</p>	